

# 『解決』による色彩調和性向上の研究〈2〉

## -3色の組合せの検討-

150441044 川野辺 直樹  
川澄研究室

### 1. はじめに

音楽理論では不協和音から協和音に移る『解決 (Resolution)』により緊張が弛緩するとされる。浅野らは色彩に対しても同様の効果が起こると仮定し、不調和配色から調和配色に時間的に推移させたところ、同様の効果が生じる配色の組合せをいくつか確認した。また、3色単体型の配置では回転により調和性が変わるため、前報の池野の実験では、新しい2種類の配置が提案された。本稿では、蜂の巣型とストライプ型の配置を用い、『解決』により調和性が向上する配色条件について検討する。

本研究は、関西大学総合情報学部の浅野教授の協力のもとに進めた。

### 2. 実験方法

実験で用いた“不調和”配色と“調和”配色の組合せは、浅野らの実験で用いられた3組 (A~C)、および、野々山らの実験[1][2]を参考に新たに作成した4組 (D~G) の計7組とした (表1)。また、配置は、前報の結果に基づき、蜂の巣型とストライプ型の2種類を用いた。実験刺激は21型ディスプレイ (EIZO FlexScanS2100) 上に10秒間提示し、被験者は「配色の調和性」を評定尺度法 (7段階: -3~+3) で回答した。被験者として色覚正常の大学生30名にご協力いただいた。

### 3. 実験結果

表2は、各グラフの横軸左側が「“調和”配色の調和性スコア」、右側が「“不調和”配色提示直後の“調和”配色の調和性スコア」 (すなわち『解決』時の調和性) で、全被験者30名分の結果を表している。傾きが正 (右上がり)

表1 使用した配色の組合せ (7組)

A	B	C	D
“不調和” “調和”	“不調和” “調和”	“不調和” “調和”	“不調和” “調和”
E	F	G	
“不調和” “調和”	“不調和” “調和”	“不調和” “調和”	

であれば調和性が向上したことを意味する。

この配色の中で調和性の向上が起きた人数の割合が多い配色は無く、調和性の向上が起きやすい配色は見つからなかった。また調和性スコアを“不調和”>“調和”で回答している被験者が多い配色もあり、“不調和”と“調和”の組合せが適切でない配色組も見つかった。“不調和”と“調和”の組合せでは配色Eが最も適切であることが分かった。

総合的な結論として調和性向上のために必要な共通の配色条件を明らかにすることはできなかった。

### 4. まとめと今後

配色における『解決』による調和性向上は現象として生じにくく個人差も大きいことから、被験者のグループを分けて考察することが考えられる。また試行回数が1回だと調和性を安定して答えられない人がいるため、複数回行う必要がある。今後も配置と配色の関係性に留意しながら実験を積み重ねたい。

### 参考文献

- [1] 野々山太郎ほか: 「解決」を用いた3色配色の組み合わせの良さ向上, 第16回情報学ワークショップ, P109 (2018)
- [2] T. Nonoyama, et al.: Studies on Effects of Temporal Color Transition on Harmony of Three-Color Combinations, 4<sup>th</sup> Asia Color Association Conference, PA-23 (2018)

表2 『解決』の効果の検証結果

